

大栄環境

2カ所でバイオマス発電所新設へ

再エネ発電を30年に15年比3倍に

大栄環境（グループ 家庭約1700世帯分本部・神戸市、金子文雄社長、☎078・857・6600）は、再エネ発電量の増加に向けて、2カ所でバイオマス発電の新施設を進める。1カ所目は、同グループの三重中央開発（三重県伊賀市）敷地内に、建設する出力規模1980キロワット（990キロワット×2基）のバイオガス発電設備。来年11月に稼働予定となっている。バイオガスは、別途建設する処理能力日量約320トンのメタン発酵施設で食品廃棄物や有機性汚泥から製造し、供給を受ける。年間発電量は約1万5000キロワット時を見込む。

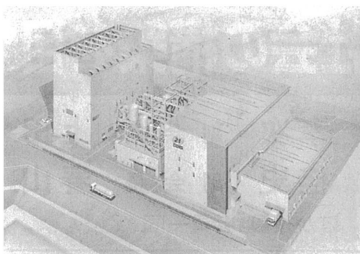
2カ所目は、三木リサイクルセンター（兵庫県三木市）内の廃木材や食品残さ等のバイオマス資源と廃棄物の混焼施設「三木バイオマスファクトリー」。処理能力は日量440トン（220トン×2基）で、出力規模が1万1700キロワットとなっている。年間約8万4000キロワット時の発電を見込み、2023年7月の稼働を目指す。

また、関西で初めて民間管理型処分場跡地にメガソーラーを導入し、再エネの創出に取り組んでいる。20年度の年間発電量は、一般家庭約1700世帯分の消費電力に相当する約5200キロワット時以上。14年に「DINGSメガソーラー」、18年には「DINGS第2メガソーラー」が和泉リサイクルセンター（大阪府和泉市）の平井処分場跡地で稼働を開始。パネルの枚数は合計1万7000枚を超える。全量を電力会社に売電する。その他、三重リサイクルセンター（三重県伊賀市）でも出力規模250キロワットの太陽光発電を行っている。

20年度の大栄環境グループの再生可能エネルギー発電量は、1万3211キロワット時。バイオマス発電の新施設も進め、再エネ発電量を30年までに15年比3倍の年間4万キロワットへと高めていく。

その他の地球温暖化対策の取り組みとしては、グループで所有する森林を通じて年間4万2000トンのCO₂を吸収している。森林面積は約8170平方メートルで、甲子園球場2100個分に相当。グループで組織するエネルギー管理委員会を設置し、効果があった省エネの事例の共有を水平展開している。自社のCO₂削減分にカーボンオフセットできないものの、RPF製造による廃棄物の再資源化や、木質バイオマス、廃ジュースなどからバイオエタノールの製造などにも手掛ける。

同社技術部の山田真



三木バイオマスファクトリー
完成イメージ図

部

部長は、「国は再エネだ。地域から出た廃棄物の比率を従来目標から高める方針を打ち出し、再び地域に還元する取組を進めていきたい」と話す。

電の事業計画は、こうした方針に込める施策

令和3年8月30日

週刊循環経済新聞